

## 【研究論文】

## 保護者の意識変化が幼児の運動能力に及ぼす影響

山下 晋\* 鳥居 恵治\*

## 要 旨

本研究は、保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化と、幼児の運動能力との関連を明らかにし、幼児の運動能力を高めるための家庭支援のあり方を検討することを目的とした。その結果、運動能力テストの結果を保護者に示すことによって、保護者が持つ子どもの運動への関心度を高めることができた。この保護者の関心度の高まりは保護者自身の運動嗜好性や子どもの運動能力に関与するものではなく、日ごろからの子どもの運動への関心の高さに関与するものであった。しかし、子どもの運動に対し、関心が高まった保護者の子どもの運動能力に明確な伸びは観察されなかったことから、生活習慣の改善や運動量の増加、幼児の運動能力の伸びには、さらに時間や働きかけが必要であることが示された。

キーワード：幼児、運動能力、保護者の意識や関心

## I. 緒言

2014 年度の体力・運動能力調査<sup>1)</sup>によると、11 歳男女の敏捷性は 1990 年代後半を底にはぼ右肩上がり伸びている。子どもの運動能力は、全体的に緩やかな向上が続いているものの、運動能力が「高い子ども」と「低い子ども」の二極化にあることが明らかとなっている。一方、ソフトボール投げのように「筋力」よりも「体の使い方」が重要とされる能力は、1980 年代半ば以降、低下傾向が続いている。

ボール投げ（投能力）は、日常の遊びの中で培う基礎的な動きが大きく関与している。我々はこれまでに投能力の伸びは「園児自身の運動嗜好性」と「休日の運動習慣」が関与していること、また、「園児自身の運動嗜好性」は「父親の運動嗜好性」が環境因子となっていることを報告してきた<sup>2)</sup>。また、「幼児期にからだを動かすように心がけ、かつ、ベビーカーの使用を 3 歳未満でやめた」家庭の子どもは、運動能力が高いことから<sup>3)</sup>、保護者の意識や関心が幼児期から学童期の運動能力に大きな影響を及ぼすことが明らかになっている。

保護者の意識や関心を高める方法として、春日<sup>4)</sup>は運動能力テストの体力評価票を配布したことによって、親子での戸外遊びが増加したり、「体力測定を毎年継続してほしい」と保護者が望むようになる

など、子どもの体力的な発育・発達への関心が高まったと報告している。

しかし、保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化と子どもの運動能力の伸びについては明らかでない点が多い。そこで本研究は、運動能力テストの結果を保護者に配布することによって起こる保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化と、幼児の運動能力と関連を明らかにすること、また、得られた結果から幼児の運動能力を高めるための家庭支援のあり方を検討することを目的とした。

## II. 方法

## 1. 調査対象

被験者は 2014（平成 26）年度に岡崎女子大学・岡崎女子短期大学（以下：本学）の付属第一早蕨幼稚園（以下：付属幼稚園）に通う年長児 73 名（以下：園児、男児 29 名、女児 44 名）とした。研究を行うにあたって、あらかじめ研究計画書を幼稚園長に提出し、承認を得るとともに、保護者に対しては研究の目的、方法、予想される結果、社会への還元、個人情報取り扱いについて書面で説明し、保護者から文書による同意を得た。

付属幼稚園では、園児に対し「大きな夢」と「感動体験」を重視して、目を輝かせて、いきいきと遊

\*岡崎女子短期大学

ぶ元気な子どもを目指し、「健康で明るい子ども（自立）」、「心の温かい子ども（慈愛）」、「よく考える子ども（創造）」の育成に努めている。全ての園児たちが運動を楽しみながら、できるようになる達成感を味わうことを目的として、年間を通して運動遊びを実践している。また、本学では、学生が実践力を身につけるために附属幼稚園の園児とともに授業を行っている。園児たちは1年間に3回程度、「幼児体育」や「子どもの研究」の授業において、学生とともにサーキット遊びやコーナー遊びなどを行っている。

## 2. 運動能力テストと運動能力テスト個人カード

3 種目の運動能力テストを村瀬ら<sup>5)</sup>の報告を参考に行った(図1)。25m 走は、スタートから 30m の地点にゴールを設けてクラス担任が立ち、園児にはゴールまで全力で走るように促し、スタートから 25m 地点の通過時間を測定した。記録は 1/10 秒単位とし、1/10 秒未満は切り上げた。

立ち幅跳びはメジャーを設置したマット上で実施した。園児は両足をそろえて立ち、前後に腕を振って両足で踏み切り、前方に跳ぶよう指導した。踏み切った場所から着地した足(踏み切り線に近いほう)の踵までの距離を測定した。記録はセンチメートル単位とし、センチメートル未満は切り捨てた。

ソフトボール投げは、ソフトボール1号球(ナイガイ社製)を用いた。園児は助走なしでオーバースローによりボールを投げ、ボールの落下地点までの距離を測定した。記録はセンチメートル単位とし、センチメートル未満は切り捨てた。なお、全ての種目の測定は2回実施し、良いほうの記録を使用した。

測定は2014年4月と2015年1月の計2回、縦断的に行った。得られた結果から、杉原ら<sup>6)</sup>が作成した「幼児の運動能力判定基準表」に基づき、5段階の得点、Tスコア及び運動能力の伸びを算出した。



図1：運動能力テストの様子  
(左) 25メートル走、(右) ソフトボール投げ

また、各園児の運動能力テストの結果は、種目ごとの得点とコメント(5点：素晴らしい、4点：すごい！やったね、3点：いいよ！そのちょうし、2点：もうちょっとだよ、1点：がんばれ)、月齢ごとに付属幼稚園の平均値、全国の平均値とともに「運動能力テスト個人カード(以下：結果個票、図2)」に示した。さらに、各種目の合計得点を度数分布にておおよその園内の順位として示し、幼児期における運動のアドバイスを記入し、保護者に配布した。

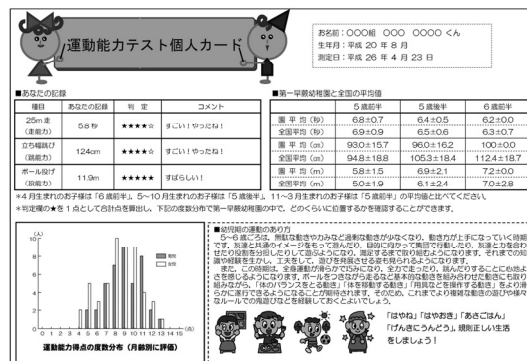


図2：運動能力テストの結果個票

## 3. 運動に関するアンケート

園児の保護者に対して、園児自身の運動遊びが好きか、保護者が持つ子どもの運動への関心度、保護者自身の運動が好きかなどについて、5段階評価で回答をするアンケート調査を行った(表1)。得られた結果から性別の平均値と標準偏差を算出した。

表1：アンケートの質問項目

- 子どもに関すること
- ・子ども自身は運動遊びが好きか
- 親子に関すること
- ・休日に親子一緒に活動するか
- ・子どもに運動遊び(自転車やボール遊び)を教えるか
- 保護者に関すること
- ・運動能力テストの結果を見た前後の、子どもの体力に関する関心度の変化
- ・子どもにとって運動あそびは大切だと思うか
- ・保護者自身は運動が好きか

## 4. 統計解析

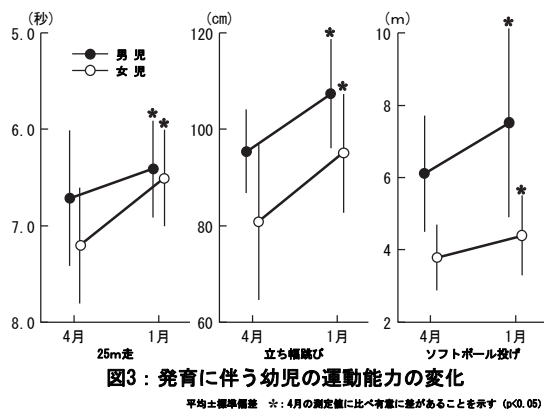
園児の発育に伴う運動能力の比較には対応のあるt検定を、運動能力テストの結果を見た後の保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化の比較には一元配置分散分析(TukeyのHSD法による多重比較)を行った。また、アンケート項目のうち「子どもの体力に関する関心度」「保護者自身は運動が好きか」を独立変数、「子どもにとって運動あそびは大切であると思うか(意識)」「休日に親子一緒に活動するか(行動)」「運動遊び(自転車やボール遊び)を教えるか(指導)」に従属変数とし、単回帰分析を行った。

なお、分析にはSPSS ver. 18を用い、本研究にお

ける統計上の有意水準は5%とした。

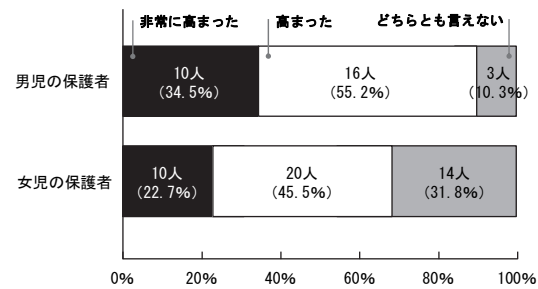
### Ⅲ. 結果及び考察

図3には、園児の発育に伴う運動能力の変化を示した。種目によっては伸び率に若干の差は見られるものの、男児・女児とも全ての種目（25m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ）において、発育に伴って有意な伸びが確認された。これは家庭で保護者やきょうだいと、またはスイミングなどの習い事で体を動かす活動をしていること、さらに、付属幼稚園でいきいきと元気に遊ぶことによって得られた運動経験の積み重ねの結果であろう。



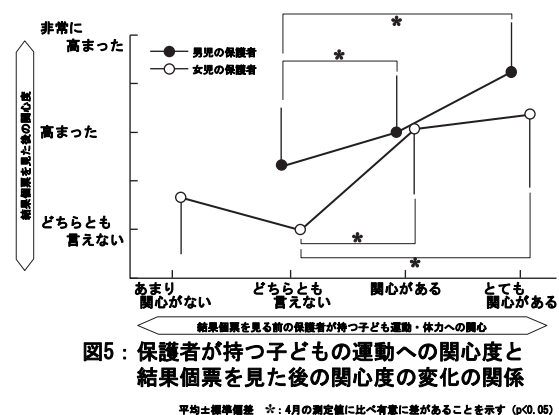
運動能力テストが終了し、結果個票を見た後の保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化を図4に示した。その結果、男児では「非常に高まった」が34.5%、「高まった」が55.2%、「どちらとも言えない」が10.3%、女児では「非常に高まった」が22.7%、「高まった」が45.5%、「どちらとも言えない」が31.8%という結果であり、男児・女児合わせて約80%と多くの保護者の関心が高まった。

男児と女児の保護者における関心度の変化の差について、春日<sup>8)</sup>による幼児の保護者を対象に「どのような子に育ててほしいか?」の調査において、男児の保護者は「心身の強さ」に、女児の保護者は「明るさや優しさ」に重点を置いている傾向にあったと報告している。このことから、男児の保護者の方が、女児の保護者に比べ、子どもの運動への関心度が高かった原因の1つに、子どもの育ちに関する保護者の期待の違いが関わっていると考えられた。



次に、保護者が持つ子どもの運動への関心度の高める要因について検討した。

図5には、結果個票を見る前後の保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化を示した。その結果、男児・女児とも、結果個票を見る前に、「どちらとも言えない」と答えた保護者に比べ、「とても関心がある」、「関心がある」と答えた保護者は、結果個票を見た後の関心度が「とても高まった」、「高まった」と有意な高まりが確認された (P<0.05)。



また、図6には、保護者自身は運動が好きであるか（運動嗜好性）と、結果個票を見た後の保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化を示した。その結果、男児・女児の保護者とも、運動嗜好性（「とても好き」、「好き」、「どちらとも言えない」、「嫌い」）と結果個票を見た後の関心度には関係が見られなかった。これは一般的に幼児の保護者は若く、その中でも運動嗜好性の高い保護者は「自身が取り組んでいる競技スポーツ」に興味を持ったり、高い関心を示しているものの、体力や運動能力が十分に発達してない幼児の運動への関心が希薄になっていることが予想された。

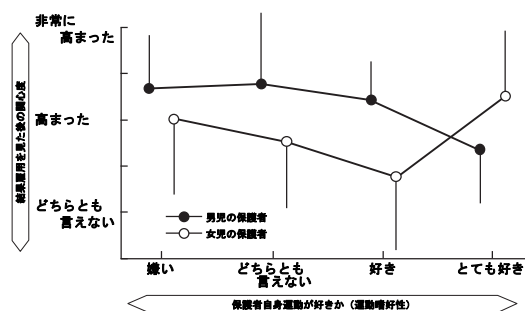


図6: 保護者の運動嗜好性と、結果個票を見た後の保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化の関係  
平均±標準偏差、有意差なし

さらに、図7には、園児の運動能力の結果（Tスコアの合計点）と、結果個票を見た後の保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化を示した。その結果、男児・女児の保護者とも、園児の運動能力の高さと結果個票を見た後の関心度には関係が見られなかった。

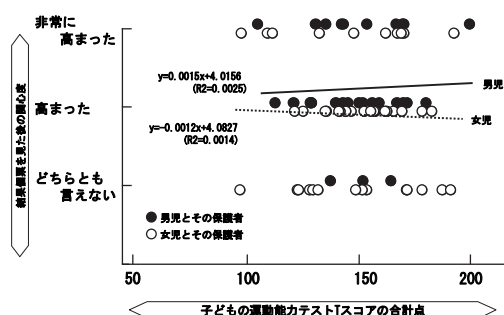


図7: 子どもの運動能力と結果個票を見た後の保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化の関係

これらの結果から、運動能力テストの結果を示すことによって保護者が持つ子どもの運動への関心度を高める要因は、保護者自身の運動嗜好性や子どもの運動能力の高さではなく、日ごろから子どもに関わり、子どもの育ち、心身の発育発達に興味・関心を持っているということが示された。そのため、幼稚園や保育所、または地域において、親子が楽しみながら運動遊びをして、子どもの運動の必要性を理解し、関心を深めるような機会を設けていく必要がある。

次に、保護者が持つ子どもの運動への関心度の変化と園児の運動能力の関係について検討した。

図7には、結果個票を見ることによって、子どもの運動への関心度が「非常に高まった」保護者の子どもの運動能力の変化を示した。その結果、男児では、関心が非常に高まった群とその他の群を比較す

ると、すべての種目で明らかな差が認められなかった。女児では、25m 走と立ち幅跳びにおいて差は見られなかったが、ソフトボール投げにおいて、2 回目の測定では、関心が非常に高まった群はその他の群に比べ、有意に低い値を示した。

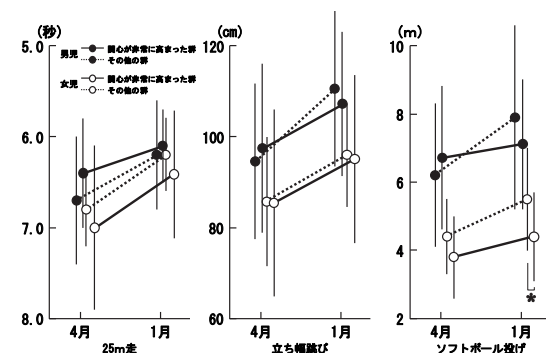


図8: 結果個票を見た後に保護者が持つ子どもの運動への関心度が「非常に高まった」子どもの運動能力の変化  
平均±標準偏差 \*：群間に有意な差があることを示す (p<0.05)

表2には、「保護者が持つ子どもの運動への関心度」及び「保護者の運動嗜好性」と、「子どもにとって運動遊びは大切であると思うか（意識）」、「休日に親子で活動する（行動）」、「子どもに運動遊びを教える（指導）」の3点について単回帰分析の結果を示した。

表2: 「保護者が持つ子どもの運動への関心度」及び「保護者の運動嗜好性」と子どもとの関わりの単回帰分析

|                       | 子どもにとって運動遊びは大切であると思う | 休日に親子で活動する | 子どもに運動遊びを教える |
|-----------------------|----------------------|------------|--------------|
| 保護者が持つ子どもの運動への関心度     | 0.273 *              | 0.148      | 0.383 **     |
| 保護者は現在運動が好き（運動嗜好性が高い） | 0.193                | -0.205     | -0.006       |

「\*\*」は1%の水準で有意、「\*」は5%の水準で有意であることを表している。

保護者が持つ子どもの運動への関心度は、子どもにとって運動遊びは大切であると思うか（意識、 $\beta=0.273$ 、 $p<0.05$ ）や子どもに運動遊びを教える（指導、 $\beta=0.383$ 、 $p<0.01$ ）に影響を及ぼしていた。しかし、保護者が持つ子どもの運動への関心度と、休日に親子で活動する（行動、 $\beta=0.148$ 、n.s.）には影響が認められなかった。これは、共働きの影響などにより、子どもと行動を共にするための十分な時間がないことを表している。一般的に、子どもの運動能力の低下の1つに「3つの間（時間、空間、仲間）」の減少が関与しているといわれている。さらに近年、「（保護者の）手間」を加えて、4つの間の減少が関与しているといわれるようになってきている<sup>9)</sup>。保護者自身が忙しいことは十分理解できるが、わが子に費

やす手間をかけることができるよう、対策が必要であろう。

一方、保護者の運動嗜好性は意識や行動、指導の全ての項目に関与していなかった。特に、保護者自身の運動嗜好性と「休日に親子で行動するか(行動)」について負の関係 ( $\beta=-0.205$ , n.s) の傾向を示したことから、保護者の中には、休日は子どもとの運動ではなく、自身が取り組んでいる競技スポーツのために時間を費やしている可能性が考えられた。

結果個票を見ることによって、子どもの運動への関心が「非常に高まった」保護者の子どもの体力が、他の子どもに比べて運動能力の伸びが見られなかった要因として、結果個票を作成、配布してから、2回目の測定までの期間が十分ではなく、生活習慣の改善や運動量の増加には至らなかったことが考えられる。

その他にも、保護者が子どもの発育に合った運動能力を高める指導方法を十分に理解していないことや、運動能力を高めるための環境が整っていないことも要因であろう。そのため、幼稚園や保育所、地域が大学などの機関と連携をして、親子で楽しみながら運動をしたり、保護者に対して身近な素材を活用して運動指導の方法を伝えるような働きかけが必要であろう。あわせて、保育者に対し、日常の保育の中で楽しくからだを動かす時間を確保し、発達に応じた多様な遊びを提供することができるようになるための研修を行っていくなどの働きかけが必要であることが示された。

#### IV. 結論

本研究は、保護者が持つ子どもの運動への関心度と幼児の運動能力と関連を明らかにし、幼児の運動能力を高めるための家庭支援のあり方を検討することを目的とした。

その結果から、運動能力テストの結果を保護者に示すことは、保護者が持つ子どもの運動への関心度を高めるが、生活習慣の改善や運動量の増加、幼児の運動能力の伸びには、さらに時間や働きかけが必要であることが明らかとなった。

#### 謝辞

本研究の実施に当たり、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学附属第一早蕨幼稚園の先生方、調査にご協力いただきました園児、保護者の皆様に心から感謝いたします。

なお、本研究は平成 26 年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学課題研究の助成を受けて実施したものである。

#### 引用・参考文献

- 1) 文部科学省：平成 26 年度体力・運動能力調査の概要、文部科学省 (2015)
- 2) 山下晋、平野朋枝、浅川正堂：幼児の運動能力に伸びに関わる生活及び環境因子、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要第 47 号、pp.25-32 (2014)
- 3) 平野朋枝、山下晋、加藤玲香、春日規克：幼児期の生活状況が学童期の運動能力に及ぼす影響、名古屋短期大学研究紀要第 52 号、pp.91-96 (2014)
- 4) 春日晃章：子どものゆとり体力を育む英才教育、子どもと発育発達 Vol.5 No.4、pp.208-211 (2008)
- 5) 村瀬智彦：幼児の体力・運動能力の科学—その測定評価の理論と実践—、有限会社ナップ、pp.91-110 (2005)
- 6) 杉原隆、森司郎、吉田伊津美：幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境因子の構造的分析、平成 14~15 年度文部科学省科学研究費補助金 (基礎研究 B) 研究成果報告書 (2004)
- 7) 杉原隆、森司郎、吉田伊津美、近藤充夫：2002 年の全国調査から見た幼児の運動能力、体育の科学第 54 巻 第 2 号、pp.161-170 (2004)
- 8) 春日晃章：幼児期に見られる男女差、体育の科学第 60 巻 第 7 号、pp.473-478 (2010)
- 9) 春日晃章編：新時代の保育双書・保育内容「健康」、株式会社みらい、p.65 (2015)